

留学・研究計画書

氏 名 友川幸	留学機関名 National Institute of Public Health Lao P.D.R
留学先国名 ラオス人民民主共和国	留学期間 西暦 2006 年 6 月 ~ 2008 年 6 月
研究テーマ 開発途上国での初等教育における学校保健の意義と役割 -ラオスの小学校でのタイ肝吸虫症予防教育教材の開発とその実践からの検討-	
研究テーマの説明 (テーマの学術的・社会的意義についても記載してください)	
<p>◇研究の背景</p> <p>タイ肝吸虫は、寄生虫の一種であり、タイ東北部や、ラオス南部が流行地とされている。これまでの当該分野の研究では、便検査を行うことにより、罹患状況を把握する研究が行われてきており、その予防策として、予防教育の重要性が主張されている。また、小学校入学時においてすでに、多くの児童が「タイ肝吸虫」に罹患していることが報告されている。主たる感染源としては、Koi-pla と呼ばれるコイ科の淡水魚料理の生食習慣が考えられており、対象地域の持つ伝統的な食習慣が罹患に強い影響を及ぼすことが指摘されている。</p> <p>◇学術的意義</p> <p>当該地域で深刻な公衆衛生の問題とされながら、未だ、その感染のメカニズムは、十分に明らかにされておらず、流行地において、フィールドワークを実施し、「タイ肝吸虫」発生に関わる当該地域の食習慣を詳細に分析した研究は見当たらない。</p> <p>◇社会的意義</p> <p>また、これまでの研究では、児童が腸管寄生虫をはじめとする寄生虫症に罹患することで、学習効果が著しく阻害されたり、成長や発達に影響が及ぼされることが明らかになっており、次世代を担う児童の健康問題の改善の取り組みは、国際社会において優先的に取り組むべき課題として認識されている。また、その対策として駆虫活動や予防教育を学校で実施することが非常に効果が高く、効率的であることも指摘されている。さらに、開発途上国において、学校を拠点とし、寄生虫対策をエントリーポイントとして、健康増進活動を展開していくことは、地域住民全体の健康状態の改善に寄与するといわれている。そして、その手法は既に戦後の日本で実践され、高い効果が実証された手法であり、その手法の応用可能性が期待されている。また、地域に特有の健康問題に対する学校保健活動の実践と研究を行うことで、子どもに保健教育の機会を提供すると同時に、将来的にラオスとその近隣の流行地において、地域住民を巻き込んだ予防活動を学校保健活動の中で実施する際の有益な情報となることが期待できる。</p> <p>◇研究の全体構想</p> <pre> graph TD A["◎ 疾病原因の解明 子ども、親、地域社会といった 包括的な視点からの地域 特有の健康問題の発生メカ ニズムの解明"] --> B["◎ 問題意識とニーズの把握 地域住民の「タイ肝吸虫」に対す る問題意識と対象地域の学校の 機能、保健教育に対するニーズ と関心を調査"] B --> C["◎ 教材の開発と実践 研究者、教師、地域行政 および地域住民の協働 による保健教育教材の 開発と実践"] C --> B B --> D["開発途上国における子どもの健康問題改善の一方策 としての学校保健活動の実践と研究の意義と役割を検討する"] </pre>	

活動報告書

記入日 2007 年 6 月 30 日

氏名 友川 幸

留学先国名 ラオス人民民主共和国

所属機関 ラオス国立公衆衛生研究所

研究テーマ： 開発途上国での初等教育における学校保健の意義と役割

ーラオスの小学校でのタイ肝吸虫症予防教育教材の開発とその実践からの検討ー

留学期間： 2006 年 10 月 ～ 2007 年 3 月

1. 活動の目的

ラオス国のサワンナケート県ソンコン郡ラハナム地区において、子ども、及び親の共有する健康問題のひとつである「タイ肝吸虫症」の予防教育教材の開発と実践をテーマにして研究活動を行った。活動においては、根拠に基づく効果的なタイ肝吸虫症コントロールの活動を実施していくために、「タイ肝吸虫症」の感染源となる魚の摂取習慣、特に生摂取に着目し、タイ肝吸虫症の感染に関連する要因、対象地域の教師の学校保健ニーズ、保健衛生に関する研修経験等を明らかにすることを目的とした。

2. 2006 年度に実施した活動

2006 年度は、以下の①～⑬の活動を実施した。

- ①対象地域における魚の捕獲状況、摂取習慣および実践されている調理法に関する情報収集
ラハナム地域に住む漁師や住民に対する聞き取り調査等により、捕獲できる魚、普段良く食べられている魚、対象地域で実践されている魚の調理法に関して情報収集した。
- ②感染地域におけるタイ肝吸虫症の感染の危険性の高い魚の特定
文献からタイ肝吸虫症への感染の原因となる魚を特定し、その魚に関してラハナム地域での捕獲状況、摂取状況等に関して聞き取り調査を行い情報収集した。
- ③対象地域で実践されている調理法に関する情報収集
対象地域で実践されている魚の調理法 15 種類について、実際に調理をしてもらい、その過程をビデオ、及びデジタルカメラで記録した。また、聞き取り調査を行い、調理法ごとの特徴に関する情報収集をした。
- ④子どもの魚の摂取習慣に関する情報収集、子どもによるタイ肝吸虫症予防のためのポスター作成
聞き取り調査により、子どもの魚の摂取習慣に関する情報収集を行った。また、教材開発の一環として、子どもにタイ肝吸虫症予防のためのポスター作成をしてもらった。
- ⑤疫学的調査による児童のタイ肝吸虫症の感染に関連する要因の検討
児童およびその親（約 120 名）に対する魚の摂取の習慣、生摂取に関する意識・態度、児童の魚の生摂取開始の年齢、捕獲の場所、頻度、養殖魚の摂取、タイ肝吸虫症に関する知識、タイ肝吸虫症の罹患経験等について聞き取り調査を実施した。
- ⑥児童、地域住民による魚の摂取記録帳記入の活動
対象地域の小学生（3 小学校の 4、5 年生）約 120 名、地域住民約 150 名を対象として摂取した魚の種類、調理法、調理者、捕獲場所、捕獲者等を記録してもらう活動を実施した。
- ⑦ラオス国における保健衛生教育教材の情報収集
小、中、高校で使用されている保健衛生教育の教科書を入手し、日本語に翻訳し、内容を分析した。
- ⑧小、中、高校生、および教師のタイ肝吸虫症の感染の高い魚の摂取習慣に関する情報収集
- ⑨小、中、高校生、および教師のタイ肝吸虫症の感染に関連する要因の検討
小、中、高校生と小、中、高校の教師に対する魚の摂取の習慣、同居している家族の魚の摂取習慣、生摂取に関する意識・態度、児童の魚の生摂取開始の年齢、捕獲の場所、頻度、養殖魚の摂取、タイ肝吸虫症に関する知識、タイ肝吸虫症の罹患経験等についての情報を収集した。
- ⑩小、中、高校の教師のライフヒストリーに関する情報収集
- ⑪小、中、高校の教師の保健教育に関する研修経験、学校保健に関するニーズについての情報収集
- ⑫小、中、高校の教師の子ども健康問題に関する意識についての情報収集
- ⑬小、中、高校生のライフスタイルに関する情報収集

3. 2006 年度に実施した活動の成果と今後の課題

根拠に基づき、実現可能な予防策を提示するための「タイ肝吸虫症」の感染源となる魚の摂取習慣、タイ肝吸虫症の感染に関連する要因を明らかにすることができた。また、上記①～⑬の地域住民の積極的な参加を必要とするような疫学的調査の実施を通して、児童や地域住民のタイ肝吸虫症予防に対する意識と関心を高めることに成功し、対象地域において、今後、地域住民と協力しながら予防教育教材の開発を進めていく見通しを立てることができた。また、2年目に実施予定の予防教育活動の効果を評価するための基礎データとして、魚の摂取習慣の現状やタイ肝吸虫症へ知識に関する情報の収集ができた。活動を通して、ラオスにおいて、タイ肝吸虫症への感染予防活動を実施していく際には、単に全ての魚の生食を禁止するのではなく、感染の危険性のある魚を特定し、生で食べることのできる魚とできない魚に関する情報を十分に提供する必要があると考えた。また、対象流域に住む人々にとって魚は日常生活において極めて重要な食材となっており、摂取の頻度も高く、多彩な調理方法が実践されており、伝統的な食文化のひとつとして根付いていることが分かった。タイにおけるタイ肝吸虫症への感染予防活動では、日常的な魚の生食の回避には効果を認めたものの、行事などでされる魚の生摂取に関しては、未だにその予防が徹底されない現状があるという。これは、魚の生食は流行地域において、すでに伝統的な食文化として根付いており、単に全ての種類の魚の生摂取を禁じるという方法は現実的ではなく、むしろ感染の危険性の高い魚を避けた生摂取の推奨が望まれることを示唆させる。また、今回実施した魚の調理法に関する調査では、対象地域の住民が魚の種類や特徴を見分け、調理法を選択していることが分かった。これには、対象地域の住民が日常的に魚を摂取する機会に恵まれていることが影響していることが考えられ、対象地域におけるタイ肝吸虫症感染の予防方法として、住民がすでに有している魚の種類や特徴を見分けることができるという知識を利用した予防方法が提案できる可能性があると考えられた。つまり、感染の危険性のある魚を提示し、感染の危険性の高い魚を避けて生摂取すること、あるいは感染の危険性の高い魚は加熱摂取を推奨することが感染源の遮断に有効であることが示唆された。

課題としては、引き続き対象地域において、感染リスクのある魚の科学的分析による特定と、感染リスクの高い魚の摂取習慣に関する詳細な情報収集、および実際に感染を予防できる調理法の開発を行う必要があることが考えられた。これまでタイで実施されてきた予防活動の情報を収集し、ラオスでの応用可能性を検討する必要がある。また、学校での保健活動に予防プログラムを組み込み、地域での保健活動と連携し、住民に受け入れられ、実践してもらえるような予防プログラムを開発するためには、実際の予防教育教材の開発とともに、地域住民や教師の学校保健に関するニーズについての情報収集、教師の保健教育に関する研修経験や子どもの健康問題に関する意識についての情報収集、小、中、高校生のライフスタイルに関する情報収集を行い、分析することも必要となると考えられた。

4. 最後に

松下国際財団、現地の受け入れ先となっている国立公衆衛生研究所の職員の方々、活動地域の住民の方々のサポートを受けて、安全に充実した活動を送ることができたことにとっても感謝しています。現地での研究活動は、仕事やお金に対する価値観の違い、経験や情報量の違いによって生じる様々なバトルの繰り返しでしたが、少しずつですが、活動地域の住民の「タイ肝吸虫症」に関する興味や関心が高まりつつあることを感じています。現地の人と学び、語りあう中で、本当に大切なことは全て現場の中で見つかった、そんな1年でした。これからも「夢」をもち、地道なフィールドワークをもとに情報を収集し、現地の住民、社会にとって役に立つ研究、地にしっかり足のついた実りのある研究、そして、活動を、住民と一緒に作り上げていけたらと思います。今後ともよろしくご指導ご鞭撻いただけますよう、よろしく願いいたします。本当に、ありがとうございました。